中国新聞　　2007/5/19(土)

ひろしま歴史回廊

第9部・再考 厳島合戦④

宮之城　海・崖に守られた要害

土曜日に掲載します

宮島桟橋の正面やや右寄りに要害山がある。一般には宮尾城跡と呼ばれるが、戦国時代の史料には「宮之城」「宮要害」などと記されている。合戦当時は、海に突き出た岬の先端に位置し、急な崖で守られた「要害」だった。同時に、厳島の港である有の浦を守るために、絶好の場所である。

■島占領直後に改修

宮之城は、毛利元就が陶を厳島におびき寄せるための囮の城として、弘治元（一五五五）年春に築いたとされる。しかし、「房顕覚書」には、その一年前の天文二十三（一五五四）年六月、陶の警固船が厳島に押し寄せたが、「城」ができなかった、と記されている。この「城」が、宮之城を指していることは言うまでもない。

もともと厳島の島内には、いくつかの城が築かれていた。宮崎山（千畳閣あたり）、勝山（多宝塔あたり）にも城があった。元就は厳島占領直後に、厳島防衛の拠点となる宮之城の改修工事を始めたものと思われる。

■弱点は陸側の尾根

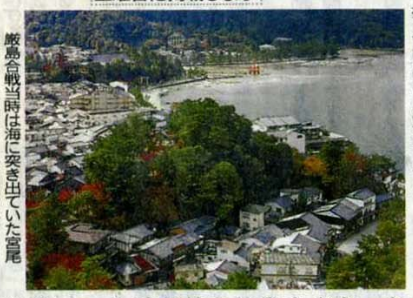
城将を任されたのは、己斐豊後守である。もとは神領衆（厳島神主家の家臣団）の有力者だったが、神主家滅亡後は大内・陶氏に従っていた。天文二十三年五月、桜尾城を毛利側に明け渡した後、説得に応じて宮之城に入ったのであろう。

海と崖で守られた宮之城の唯一の弱点は、陸側の尾根続きである。そこで尾根の狭くなった部分を遮断する空堀を設けて敵の侵入を防いだ。これを「尾頸之堀」という。

もう一つ重要なことは水である。岬の先端に位置する宮之城は、用水の確保が難しい。まずは宮島の町から水甕を徴発して城に運び上げた。さらに尾根続きの山からの伏流水を井戸を掘ってくみ出した。城の用水源を「水の手」というが、地形の制約上、「水の手」は「尾頸之堀」近くに求めることになる。

この「尾頸之堀」と「水の手」をめぐる攻防が、宮之城の命運を左右することになる。

（秋山伸隆・県立広島大教授）



厳島合戦当時は海に突き出ていた宮尾城跡（宮之城）＝中央の緑の小山